

私の体験から

結城 太一郎 口述



目 次

1、健康と信用	2
2、人生の基は家庭	2
3、生活の本拠育成	2
4、何事も原理原則（真理）に則って	2
5、大自然の教訓	3
6、物ごとは善意に解釈する	3
7、原因があって結果がある	3
8、信仰と祖先の供養	4
9、我が社の伝統精神	4
10、社外の関係	5

1、健康と信用

健康と信用は我が社の社是である。

我々がこの世の中に生存するには、健康と信用程大切なものはない。人間がこの世に生を得たならば誰も長く生きようと希わぬ者はないだろう。長く生きるには先ず身体が健康でなければならない。この世の中は大勢の人々の集まった社会であるから、その中で真に長く生存するには、信用のある者でなければならない。一口に信用ある者とは何事も正直で、誠実で、勤勉で、親切で、他人には迷惑をかけない真に人間としての精神面を言うのである。肉体と精神とが健全であってこそ、有意義な生存が出来るのである。会社、事業場も健康体であって信用がなければ長く生存繁栄することが出来ない。

我々個人の真の財産は、健康と信用であって、物質は絶対的の財産ではない。

2、人生の基は家庭

我々の人生は家庭から始まる。何事も基礎が堅固でなければ、如何に地位、名誉、物質上の財産を得ても何時かは倒潰する。家庭程大切なものはない。家庭の淋しい人は不幸だ。幸不幸は物質面のみに左右されるものではなく、精神面が最も大きく影響する。

自分を取り巻く者の幸せを考えて楽しい、明るい家庭を建設することこそ幸福の第一歩だ。万一家庭の中から不良の者でも出すと、そのため一家が世間を狭くし、この世の中を如何に住みにくくするかを考えると、自分だけ良ければ、とは考えられない。みんなが幸せになってこそ、自分も幸せになるのだ。子供は溺愛でなく、真の愛情をもって育てなければならない。特に母親の愛育で立派な偉い人間が出来る。

3、生活の本拠育成

我々の生活の本拠は三條機械製作所である。

三條機械の興亡は直接我々の生活に影響する。我々は三條機械を育成しないで、どうして我々の幸せが得られようか。縁あって三條機械の一員となったからには、三條機械は我が家だ。各々、与えられた責任を尽し、家長は家族の幸せを希い、家族は家長を助け、協力一致我が家の興隆を図ることこそ、家族全体の幸せとなる。

三條機械即ち我が生命

4、何事も原理原則（真理）に則って

如何なる時代が来ようと、世の中がどんなに変わろうと原理原則は不変である。世の中で起きる問題は益々複雑となり、ややもすると判断を誤ることがある。この場合何事でも原理原則。即ち、真理に照して物事を分析し、焦点を掴み、処理したならば解決が早いし間違いがない。法律や道徳は時代によって変わるが大自然の法則は絶対不変である。法律に違反した行為は国が罰するが、真理に背した行為は大自然が罰する。

5、大 自 然 の 教 訓

大自然は日常我々の生存に対し、いろいろのことを教えている。毎年のように台風あり、豪雨豪雪あり、その都度大きい被害を蒙る。被害のあることはそれに対する防備が出来ていないためである。備えあれば憂いなしを教えている。

登山は我々の人生行路に大切なことを教えている。山を登るときは困難であるが、その困難を克服し頂上に達したときは大きな喜びがある。下りは体力的にも楽であるため、ややもすると油断があり、足をすべらし谷底へ転落する危険がある。下りの楽なときこそ次の上りに備えて充分体力を養うべきである。人生行路は常に平坦な道のみでない。逆境のときは苦しいが、これを克服したとき大きな喜びあり、貴重な体験を得る。この体験を重ねることにより次の山々を征服することが出来る。物ごとが好況に進んで来たときこそ、好事魔多しとか、万事注意が肝要だ。山には上り下りがある如く、好不況も周期的の波がある。年々登山には犠牲者を出す山に対する研究と先駆者の経験を聞くことが足りないのではなかろうか。人生行路に於いても然り、年長者先輩の貴重な体験を聞くべきだ。果物を栽培するには肥料を施し、害虫を駆除し、いろいろと手数をかけて育てた結果、おいしい果物をとることが出来る。何等手入を行わず果物だけとるときは、ついに果樹を枯死させてしまう。現在の労働運動の一部には果物をとることだけに力を入れて、果樹を育てることを忘れてはいないだろうか。果物は熟して賞味される。物ごとは熟して来て断行すれば成功する。熟さないうちに無理して断行するときは、いろいろの困難が伴い、渋い柿を食うが如し。我々は日常の自然の現象、自分の周囲、足元をよく見ると尊い自然の教えが沢山ある。それを見逃してはならない。

6、物ごとは善意に解釈する

総て物ごとは善意に解釈する。禍いを転じて福となすの格言の通り、我々の考え方によって幸不幸は左右される。如何なる逆境に立っても考え方によって、これが将来幸せになる基を造る場合がある。人からしいたげられたり、つらくあたられても、その人を恨むことなく自己を反省し、有難いと言う気持ちになって奮起し、よい方に進んで行ったらばよい結果が得られる。自分自身を苦しめることは愚の骨頂だ。幸せは誰にもある。幸せだと考えない処に不幸せがある。感謝の心のない人や、常に不平を言う人には幸せはない。

7、原因があつて結果がある

この世の中は実によく出来ている。原因のないところに結果はない。善因善果、悪因悪果、これは当然のことである。結果だけが出来てくることは絶対にない。麦の種を蒔けば麦が出る。麦の種を蒔いて米が獲れることはない。自分達だけどうしてこうも不幸せなのだろうと歎く人もあるが、それには幾多の原因がある。悪い原因は取り除かねばならない。然らば悪いことをしたら一生浮かばれないかと言えば、その人が悔い改めて善根を施すことにより、悪の芽や雑草を枯死させることが出来る。これには非常な努力が必要で数々の善根を施さねばならない。一度信用を失墜したら、これを回復するのが如何に困難であるかを考えねばならない。我々個人は勿論だが、三條機械の信用を墜すなかれ。

8、信仰と祖先の供養

月の世界へロケットを飛ばす迄人智が進んで来たが、宇宙大自然から見たら人間の知識など微々たるものだと思う。現に我々は自分自身の一寸先がわからない。長い人生にはわからないことが沢山あり、殊に精神面に悩むことが非常に多い。前述した健康と信用と一概に言うが、肉体を健康に保つことは或る程度出来るが、精神面に悩みを無くし健全な精神を造ることは容易でない。釈迦やキリストは人間の精神面の苦悩を救うために、いろいろの教えを示された。苦しいときの神だのみ。溺れる者は藁をもつかむの譬の如く、自分自身で総ての苦悩を処理することはむずかしい。聖人君子ならいざ知らず、矢張り人間である。何かよりどころを求めなければならない。そこで自分の信ずる何かの信仰を持ち他力と自力によって処理することが必要ではなからうか。人間が死んだらその先はどうなるかわからないが、世の中に不可思議のことが沢山ある。一々何もかも迷信と決めつけることの出来ないことから考えて、霊魂不滅説も出てくる。実験の結果霊が現われて、現世人の病気の手術を行っている。現在では学問的にこれを証明することは出来ないと言っているが、いろいろのことから考えて私も霊魂不滅を信じている。若しも霊ありとしたならば私自身の肉体は亡びても、私の霊が家族並びに三條機械を見守り霊界から皆んなの幸せを念願したいと思っている。私は会社の不況のとき祖先の墓所へ幾度も参詣し、祖先の御加護を祈念した。祖先の供養を怠ったためにいろいろのことが起きた例がある。我々は常に祖先を崇拜し供養を怠らない。その心掛けが一面、自ら助くる者は助くということになるのではないか。人に親切にすれば人は又我れに親切にするだろう。このことは霊界にも通じるだろう。

9、我が社の伝統精神

(1) 三條機械製作所は此処に働く我等全員の会社であることを常に念頭において物ごとを考察し、その処理に当らねばならない。

(2) 経営の衝に当る者は常に全従業員の幸せを第一に考え、幹部社員は経営陣を助け、会社の発展に寄与しなければならない。

(3) 経営陣は出来るだけ社内から経営の才能のある者を選ぶべきだが、会社が事業も拡大し資本も増大したときは、外部からも求めなければならないが、その際は飽くまで我々の伝統に添う人物を選ばねばならない。

(4) 我が社は一般株主と従業員とにより構成されているので、特別な資本家と称するものはない。経営陣は勿論、全員が俸給生活者である。資本は株主の出資であるから、常に株主からも喜んで貰えるように務めねばならない。

(5) 現在我が国の経済状態では、労働に対する報酬が満足に支払われているとは思わない。それにはいろいろの事情もあるが、先ず我々は、我々自身が会社の業績を盛り上げて相互の収入を増すより他ない。

(6) 経営陣並び幹部社員が部下を指揮するのにも労働に対する報酬が満足に支払われていないと言うことを常に念頭において、人間と人間との人情の機敏をわきまえて部下を指揮しなければならない。人を使う程むずかしいことはない。

信頼する人となら、どんな苦勞もいとわないと言う部下を多く持つ幹部は幸せだ。従ってこのような立派な幹部の沢山いる会社は必ず発展する。私が曾てシベリア出征のとき当時は、天皇陛下の御為、国のためを強く教え込まれたときであったが、それでも兵隊が、いざ戦闘で死に直面するときは、この指揮官となら喜んで死ぬと言う場面を見た。反面あんな奴(信用のない指揮官)と一緒に死ぬのかいと、いう場面も見た。指揮官により如何に戦力が強弱になるかを伺い知ることが出来た。会社は人が運営するのだ。会社の真の財産は優秀な人材と信用である。優秀な幹部を養成することこそ会社を発展させ、みんなを幸せにすることが出来る。

(7) 「人の和」。これ程世の中に大切なものはない。要するに個人個人の和が、家庭から職場、会社、社会と拡大されねばならないのだが、それには相互の心構えが大切で、この世の中は共存共栄の社会だから、自分勝手な言動は謹まねばならない。人の和によって我々は愉快地に働き、職場を明るくし会社を発展させ、みんなを幸せにすることが出来る。特に人の和について幹部は意をもちいなければならない。

(8) 新規事業や物ごとを立案するときは常に最悪の場合を計算し計画しなければならない。誰しも良い方の計算には力を入れ、獲らぬ狸の皮算用のような計算をしたがるものだが、これは危険だ。計画通りに物ごとが進めばよいが、世の中は思うようにならないものだから、いろいろの事態に備え、最悪の場合はどうするかを考究することを忘れてはならない。進むことのみ知って退くことを知らない者は戦さに負けた。特に退く時期を誤ると全滅する。人に金銭を貸してやる場合も一度自分の手元から出た金は最悪の場合は返って来ないことも考えて置かないと、それがために親しい友人と仲違いするようなことになり、親切が仇になる。

(9) 会社主脳部は従業員に対し、高度の技術指導をなすことは勿論だが、精神面の教育に最も力を入れなければならない。上記した各項は何れも精神面に関することを記したが、同じ機械を操作し製品を造る場合にも精神の打込んである製品と精神のはいらぬ形ばかりのものとは非常な違いがある。我が社の製作した製品には何れも我々の魂が吹き込んであるものでなければならない。

戦時中我々は銃後にあり、産業戦士として精根を尽して製作した製品に対し、周囲にしめ縄をめぐらし、神宮を招き入魂式を行い、あたかも兵士が戦場へ行く如く歓呼で送り出し、立派な働きをしてくれるようにと祈念したではないか。平時に於いてもこの精神が大切なのである。“三條機械の伝統精神を生かせ”

10、社外の関係

この世の中は一人で何ごともなしとげることが出来ない。大勢の人々が互いに助けあい、持ちつ持たれつの中である。社外の人々の協力援助がなければ、一日たりとも会社を存続することが出来ない。人間はややもすると自分の独力で物ごとをなしとげたと考え、大切な世の中の恩恵協力を忘れがちなものだ。子供が大人になった親の恩、社会の恩を忘れ、一人で大人になったように言う。我が社には大事なお得意先があり、各方面の指導、援助、協力あればこそ存立する。会社全員は、常に各方面の恩恵に対し有難いと言う感謝の念を忘れず、社外の人々に接しなければならない。

特に応対するときは、会社を代表する心構えで懇切丁寧で慎重に行動しなければならない。不謹慎な言動は三條機械の信用を失うばかりでなく、何某が悪いと言わず三條機械の者が悪いと言い、全員が汚名を蒙ることになる。心すべきだ。殊に我社の生産の一部を担当する協力工場には常に感謝の意を表し、特に協力工場に接する係員はこの心掛けが肝要だ。出来得れば協力工場のいろいろの問題に対しても親身になって相談相手になってやり、優秀な協力工場は手離してはならない。